



明和元年(1764)頃 紙本墨画 双幅のうち右幅 224.9×246.0cm 重要文化財 三重県松阪市 朝田寺蔵



CHRONICLE
OF MIE
VOL. 11
【美術編】

山口泰弘 やまぐちやすひろ
教育学部・美術教育講座教授
専門は江戸時代絵画史

曾我蕭白の卓抜な水墨技法が
いかに発揮された
「唐獅子図」。
伊勢漫遊時の作とみられ、
筆の勢いのままに
書かれたと思われる落款には
誇り高き
蕭白の姿がうかがえる。

曾我蕭白 唐獅子図

CHRONICLE OF MIE【美術編】で曾我蕭白(1730~81)を取り上げるのは、「雪山童子図」(Vol.39 2009年)に続いて二回目となる。

「雪山童子図」は、極彩色が騒がしいほどの不協和音を奏でるどぎつい画であり、彩色画としては「群仙図屏風」(重要文化財・文化庁)と双璧をなす蕭白画として知られる。しかし、蕭白の彩色画はどれも高度な達成段階を示してはいるものの、蕭白の遺作からすると数としては片々たるものに過ぎない。遺作の圧倒的多数を占めるのは、水墨画である。水墨画とは、あらゆる形態と彩色を墨線の肥瘦と墨面の濃淡に置き換えて描く画である。古来中国では、墨色は五彩(陰陽五行説に基づいてこの世界を表すすべての色)を兼ねるとされ、墨一色で描かれているもの、実際、墨の摺加減によって生み出される変幻自在の濃淡が、華麗な色彩すら感じさせる画も少なくない。

蕭白は水墨の卓抜な画技で一頭地を抜く存在であり、ここで紹介する「唐獅子図」は、水墨の画筆を縦横無尽に駆使して描いた画として高い評価を受けている。

まず、筆ではなく箒のようなものに淡墨をたっぷり含ませて獅子の鬣や尻尾を掃き、余白をやや濃い墨面で充填した後、濃墨の刷毛と太筆を持ち換えて獅子の輪郭や岩皴を手早く描き、点苔を打ち、最後に同じ太筆で落款を大書して、一連の速描きを終えている。おそらく、酒の力などを借りて興が乗ったところで一息に描き上げたものだろう。落款は、普通、画筆ではなく書筆を持ち替えて書くものだが、一気呵成に描き切った高揚感その

ままに書筆に持ち替える寸暇さえ惜しんで書いたのであろう。近在の人々を集めて、衆人環視の中で繰り広げたパフォーマンス、といった光景を想像してもよい。

さすがに獅子のプロポーションはくずれ、滝口のモデリングは模糊としたものになっているが、墨のグラデーションの豊富さ、筆捌きの自在さ闊達さはそれを補って余りある。現在では巨大な掛幅に改装されているが、当初蕭白に与えられた画面は、三重県松阪市郊外にある寺院の本堂壁面であった。明治の終わりに、桃澤如水という日本画家



「唐獅子図」左幅

が、三重県内に蕭白が遺した足跡を辿り、多くの逸話を採集したことは、「雪山童子図」で紹介した。「唐獅子図」について、如水は、次のように記している。

朝田の地蔵にも蕭白の遺墨がある。本堂の壁には、墨絵の獅子で右は岩に噛みついた形、左は滝にうたれてゐる所、右の方は平安蕭白、左の方は皇園散人曾我暉雄と款して印はない。*

と、事実関係だけを簡潔に書きとめており、制作にまつわる逸話には言及していない。

「朝田の地蔵」は、松阪市朝田寺の通称。平安初期の本尊「木造地蔵菩薩像」(重要文化財)がその名の由来となっている。「墨絵の獅子」すなわち「唐獅子図」は、本尊を左右から挟むかたちで、壁に阿形卍形として貼りつけられていた。蕭白の画は、ほかにも、杉戸画「桐に鳳凰図」「萩に兎図」「月夜靈獣図」「旭日に杉図」(重要文化財)や屏風、掛幅が残されている。

其画変化自在なり、草画の如きは藁に墨つけてかきまはしたる如きものあり、又精密なるものに至ては余人の企及ぶものにあらず

これは、画人伝『近世逸人画史』(岡田樗軒・1824年)の蕭白評である。蕭白の画は変幻自在融通無碍で、草画すなわち略筆で描いた水墨画には、まるで藁に墨をつけてかき回したような大胆な作風の画があり、細密な画は誰も及びもつかないほど精緻であった。極めて振幅の広い蕭白の画域の特徴を見事に言い当てている。

「唐獅子図」は、「寒山拾得図」(重要文化財・京都市興聖寺蔵)とともに、「草画の如きは藁に墨つけてかきまはしたる如きもの」の典型として、蕭白を代表する作といつてよい。「皇園散人曾我暉雄」(左幅には「平安蕭白画」)と署された異例ともいえる巨大な落款は、「皇園」すなわち京の画人たるプライドとブランド意識を誇示する意識が働いている。京都に住む蕭白は、20代後半から40代初めにかけて三度にわたって伊勢地方を漫遊しているとみられているが、この画は、35歳前後、二度目の伊勢漫遊時の作とみられる。

*左右の指摘は如水の誤信で実際は左右逆となっている。



【1】朝田寺本堂(1652年)「唐獅子図」は、本堂内壁上に、本尊「木造地蔵菩薩像」を左右から護持するかたちで貼りつけられていた。朝田寺は、花の寺として知られ、毎年ゴールデンウィークの頃、牡丹の開花に合わせて蕭白の画が公開される。

【2】「寒山拾得図」双幅 重要文化財 京都市興聖寺蔵 興聖寺は、蕭白の菩提寺。寺内には墓所がある。同寺は、津藩主藤堂家とも深いつながりがあり、蕭白の伊勢地方漫遊のきっかけをつくったと考えられる。